**『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース**

**凡　例**

（作成の目的と特徴）

『大正新脩大蔵経』底本・校本データベース（以下「本データベース」と称す）は、『大正新脩大蔵経』（以下「大正蔵」と称す）の第一期刊行事業において刊行された正蔵部分第1～55巻を対象に、『[昭和法宝総目録](https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01733705)』第1巻pp.153～656掲載の『[大正新脩大蔵経勘同目録](https://www.kanzaki.com/works/2016/pub/image-annotator?u=https://static.toyobunko-lab.jp/taishozo/iiif/kandomokuroku/manifest.json)』（以下「『勘同目録』」と称す）に記載される各経典の底本・校本に関する情報と、大正蔵第1～55巻の脚注に記載される底本・校本に関する情報とを収集した上で、『勘同目録』・脚注双方の情報を対照させたものであり、各経典の底本・校本に関する情報を一覧できるようにし、大正蔵を利用した仏教研究に資することを目的とする。

『勘同目録』・脚注はそれぞれ一長一短のある資料であるが、データベース化して横断検索できるようにすることで、双方の欠点をカバーし、かつ比較対照しつつ、底本・校本の情報を知ることができる。

そこで、2020年8月、東京大学史料編纂所助教の中村覚氏の協力を得てデータベース化を試みた。本データベースは、これをさらに活用・拡充するため、2021年度に基盤研究(A)「漢文大蔵経の文献学的研究基盤の構築：『大正新脩大蔵経』底本・校本DBの活用と拡充」（[21H04345](https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21H04345/)）を獲得して、システムの整備と高精細画像への差し替えを行った上で、2021年7月6日に一般公開し、さらに2022年10月に画像データや書誌データを追加してリニューアル公開したものである。

本科研のメンバーは、下記のとおりである。

研究代表者

[會谷佳光](https://researchmap.jp/aitani-0001)（東洋文庫研究員）

研究分担者

[相原佳之](https://researchmap.jp/aiharayoshiyuki)（東洋文庫研究員）

[中村　覚](https://researchmap.jp/nakamura.satoru)（東京大学史料編纂所助教）

[宮崎展昌](https://researchmap.jp/tensho_miyazaki)（鶴見大学仏教文化研究所准教授）

[清水信子](https://researchmap.jp/nobucos)（東洋文庫研究員）

（データの収集と記載）

１　基本情報

　　「[SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2018版 (SAT 2018)](http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/)」から、経典番号、経典名等に関する情報をコピーした上で、収録巻次、部門、および大正蔵各巻の奥付より配本順次、出版年月日に関する情報を収集して記載した。

2022年度のリニューアルでは、鎌田茂雄ほか編『[大蔵経全解説大事典](https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA37121232)』（雄山閣、1998年8月）によって、あらたに経典の別名・巻数・訳著者名を追加した。

２　『勘同目録』

『勘同目録』著録項目❶～❼のうち、底本・校本にかかわる「❹原本及校本」、「❼備考」を対象にデータを抽出して、「底本/校本」、「❹」、「❼」、「❼備考」の４欄に分けて記載した。

「底本/校本」欄には底本・校本の別を記載し、「❹」欄には「❹原本及校本」の情報を記載し、「❼」欄には「❼備考」のうち底本・校本の書誌に関する詳細情報を記載し、「❼備考」欄には、「❼備考」のうち底本・校本に関する欠本等の補足情報等を記載した。

３　脚注

大正蔵の第1～27回配本分は、各巻全頁の脚注を対象に、底本・校本の略号を収集し、「底本/校本」、「テキスト」、「備考」の３欄に記載した。第28～55回配本分は各経典の冒頭の脚注に記載される底本・校本情報を記載するとともに、第1～27回配本分同様、各巻全頁の脚注に記載される底本・校本の略号を収集し、「底本/校本」、「《新添部分》」、「テキスト」、「備考」の４欄に記載した。

「テキスト」欄において「〔　〕」付きで記載される書誌情報は、脚注に底本・校本が明記されず、『勘同目録』や他の脚注によって補足したものであることを示す。

脚注で〈原〉・〈甲〉・〈乙〉等、不特定のテキストを表記するための略号が使われている場合は、「《新添部分》」欄に略号を記載し、「テキスト」欄に書誌情報を記載した。

「備考」欄には、脚注に記載される底本・校本に関する欠本情報等を記載した。

２０２２年度のリニューアルでは、「底本/校本」欄に「未収」の項目を新たに設けて、未収テキストを追加した。今回は大正蔵に収録されている経典のうち、「宮本」に収録されているのに、大正蔵の底本・校本には採用されていない経典595件を追加した。また、これまで脚注としてデータを登録していなかった梵本・巴本の情報を追加した。

（データの校正）

本データベース掲載の底本・校本データの校正にあたっては、一般財団法人人文情報学研究所の永﨑研宣主席研究員のご協力を得て、「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2018版 (SAT 2018)」（既出）から抽出したデータとの照合を行い、データの校正に活用させていただいた。

（詳細情報の付与）

底本・校本のデータは、原文の表記ゆれ等により、遺漏なく検索結果を得られない場合がある。そこで、各テキストに対して標準名称、刊写にかかわる国・時代・年（西暦）・刊行者・刊者の別・所蔵者等の情報を詳細情報として追加することで、検索・利用しやすいようにした。なお、書写年等は[大正蔵各巻の巻末に掲載される「略符」](https://app.toyobunko-lab.jp/s/main/collection/ryakufu)（注１）に依拠して記載したものであり、必ずしも正確ではない。今後、原典調査によってデータを補正する必要がある。

データの補正のため、本科研では、手始めとして、底本・校本のうち大学図書館所蔵本全346件を対象に書誌調査を進めており、今後、仏典の書誌データベースを構築して、本データベースとリンクさせる予定である。

（「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2018版 (SAT 2018)」へのリンク）

「基本情報」の「経典名」欄より、「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース2018版 (SAT 2018)」（既出）の該当経典の冒頭を参照できるようにした。

（『勘同目録』IIIF画像へのリンク）

『勘同目録』の初版（家蔵）をデジタル撮影してIIIF化を行い、本データベース「詳細情報」の「勘同目録所在」欄より、『勘同目録』の該当箇所の画像を閲覧できるようにした。

（酉蓮社(旧増上寺報恩蔵）本のIIIF画像・目録データベースへのリンク)

大正蔵の底本・校本に採用された[酉蓮社](https://u-renja.info/u-renja/)本をスキャニングしてIIIF化を行い、本データベース「脚注」の「テキスト」欄に表示したIIIFマークより、酉蓮社本のIIIF画像を閲覧できるようにした。また、「脚注」の「テキスト」欄に表示したテキスト名より、「[酉蓮社（旧増上寺報恩蔵）蔵嘉興版大蔵経目録データベース](https://static.toyobunko-lab.jp/u-renja/)」の「書名目録」に登録される該当経典に遷移できるようにした。

本科研では、酉蓮社の嘉興蔵（正蔵1418冊）を8000万画素のカメラを使ってデジタル撮影してIIIF規格で公開する計画を立てている。2022年度のリニューアルでは、2021年度に撮影した335点33,330コマ（全42函309冊）の画像データを新たに公開した。

2021年1～3月、SAT大蔵経テキストデータベース研究会が酉蓮社本『放光般若波羅蜜経』等73冊のデジタル化を実施し、同年9月、IIIFに準拠した「[酉蓮社所蔵　万暦版大蔵経（嘉興蔵）](https://dzkimgs.l.u-tokyo.ac.jp/omekas/s/yurenja_kkz/page/view)」サイトを公開した。

本データベースでは、SAT大蔵経テキストデータベース研究会がすでに撮影・公開した経典は重複して撮影せず、2022年度のリニューアルの際にデータベース連携を行って、本データベースでもSAT撮影の画像を表示できるようにした。

（「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」所収「宮本」へのリンク)

2022年度のリニューアルでは、「[宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧](https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_search.php)」（注２）にて公開されている福州版大蔵経（[［大蔵経］(或称一切経)1454種5733卷　附字函釈音532卷](https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_body.php?no=007075)）、いわゆる「宮本」の全文影像データベースとの連携を行い、本データベースから宮本の画像を表示できるようにした。

（レビューの収集）

本データベースでは、トップページに「[アンケート](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSd1gYA3qgLN2qQKn4o5vuzbma3Dgtoj_u555SVNuIgM4CSc-g/viewform)」フォームへの入り口を設け、利用者のレビューを収集できるようにしている。収集したレビューを活用して、データベースの改修に活用する。

（関連論文）

本データベースに関連する拙論は下記のとおり。利用にあたって適宜参照されたい。

「[『大正新脩大蔵経』の初版・再刊・普及版の刊行をめぐって](http://id.nii.ac.jp/1629/00007370/)」（『東洋文庫書報』第51号、2020年3月）

「[『大正新脩大蔵経』の底本と校本―巻末「略符」・『大正新脩大蔵経勘同目録』・脚注の分析を通して](http://id.nii.ac.jp/1629/00007257/)」（東洋文庫リポジトリERNEST 2019年度科学研究費補助金 研究成果、2020年3 月）

（データの更新とデータベースの拡張）

本データベースのデータに対して、追加・修正等が必要となった場合は、随時データを更新する。また、今後、底本・校本として登録された各テキストについて、原本の書誌情報や本文の画像・デジタルテキスト等を追加することで、データベースを拡張していく予定である。

上記に記したデータの更新とデータベースの拡張によって、本凡例も随時改訂することとする。比較的規模の大きな更新に当たっては、東洋文庫ホームページ、および本データベース上で告知等を行う。

最後に、『勘同目録』のデジタル化にあたっては、株式会社カロワークスに撮影を依頼し、高精細画像を作成いただいた。大蔵出版株式会社には、本データベースの公益性をご考慮いただき、『勘同目録』のデジタル公開についてご許可をいただいた。酉蓮社本のスキャニング作業にあたっては、酉蓮社の青木照憲住職、細川聡洋副住職にひとかたならぬご厚情ご協力を賜った。基本情報の追加、および酉蓮社本の画像データのIIIF化等においては、明治大学大学院生の藤本航輔氏にご尽力いただいた。ここに記して、関係各位に対し、厚く御礼申し上げたい。

本データベースは、JSPS科研費[18K00073](https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18K00073/)、[21H04345](https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21H04345/)の助成を受けたものである。

以上

公益財団法人東洋文庫　主幹研究員

會谷佳光

2020年8月19日記

2022年10月９日改訂

（注１）大正蔵第1～55巻（漢文部分）の巻末には「略符（Abbreviations）」が採録されている。この「略符」は、大正蔵各巻の脚注に用いられた底本・校本を表す略号と、文字の異同等を略記するための校勘記号の説明からなり、読者が大正蔵各巻の脚注を理解するための凡例としての役割を果たしている。この略号・校勘記号の説明は巻ごとに微妙に異なっていて、大正蔵の初版の配本順に並べ換えてみると、全3 期14種に分類できる。

（注２）「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」は、2012～2016年度科学研究費補助金・基盤研究(A)「宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討—デジタルアーカイブの構築を目指して—」（研究代表者：住吉朋彦、[24242009](https://kaken.nii.ac.jp/ja/search/?kw=24242009)）、および2020～2024年度基盤研究(A)「江戸幕府紅葉山文庫の再構と発信―宮内庁書陵部収蔵漢籍のデジタル化に基づく古典学―」（同上、[20H00013](https://kaken.nii.ac.jp/ja/search/?kw=20H00013)）等（1）による研究成果の一部であり、筆者も研究分担者として参加し、宮本の書誌作成を担当した。「宮本」の書誌については、宮内庁書陵部蔵漢籍研究会編『[図書寮漢籍叢考](https://ci.nii.ac.jp/ncid/BB2594623X)』（汲古書院、2018年3月）の図録編「Ⅲ宋版」に「38.［大蔵経］（或一切経）1454種5733巻附字函釈音532巻」として掲載されている。